学校教育目標　「夢や志を抱き、未来を主体的に切り拓ける逞しい生徒の育成」

～ *Think and Share, even more, be Ambitious!* ～

「稽古に泣いて土俵に笑う！』、『最後は絶対笑いたい』という強い気持ちで」

大相撲界の尾車部屋親方、尾車浩一氏は、次のように言っている。「一番怖いのは怪我ではないし病気でもない。他人でもない。自分自身なんです。ただ、私も人間ですから、最初から『やってやろう』なんて思わないわけです。凡人ですから、『終わったな』『無理だな』『もうダメだ』と思うことも何度もありました。」

そこで、何かのために頑張るというものを常に持っている人でないとダメだと言っています。親方は、今日は弟子のために稽古場に戻らなければならない、もう一度家族に笑いを取り戻させたい。そしてお世話になった相撲界に恩返しするためにもう一度働きたいということが大きな目的だったそうです。「自分だけのためにやることは、しょせん甘いです。自分は楽を選びたいし弱いです。誰だって嫌ですよ。苦しいこと、辛いことは」と付け加えています。

稽古中も、親方に「ほら、琴風（現役時代の四股名）、四股（しこ）を二百回踏め」と言われると二百回踏んだ後に、「おふくろのためにもう二十回」「俺の出世を祈っている田舎のおばあちゃんのためにもう二十回」とそうやって四股を踏んできたんですよ。それがプロの世界で、競争の世界だと強調しています。

だから弟子にこう言ったそうです。稽古が終わった後、礼儀として親方である私に「どうもごっつあんでした」と挨拶にくる。その時、「ここまではおまえがやったんじゃないよ。親方に言われたからやったんだ。ここまではやらされているんだ。ここからはおまえが誰のために頑張るかだよ」と。一日十回余計に四股を踏む。一年で三千六百五十回です。この回数は、一日ではできません。この少しの差が人との差になると言っています。

尾車親方が現役時代、サインを求められると「稽古に泣いて土俵に笑う」と書いていたそうです。また、怪我をして休場したときは、「この日のことを笑って話せる日が来るまでは、絶対に泣かない！絶対にあきらめない！」と思ってリハビリをしたそうです。「どん底に落ち、一度は笑いを失いかけ、そんな時も笑いを取り戻したい。最後は絶対笑ってやる！」と自分を奮い立たせたそうです。

生徒のみなさん、一番の敵は、ライバルではありません。自分自身です。自分の頑張り度を測る心のハードルをだんだんと低くしていませんか。頑張りきろうというラインをだんだんとすぐに達成できるところにラインを引き直していませんか。「最初の志と違う」とか「現実はこんなもの」と自分に甘い言葉をかけてなんとなく納得させようとしていませんか。学校教育目標のめざす生徒像の一番目は「目標をもってあきらめない」です。そして二番目は「どう工夫すればよくなるか考えられる」です。支部総合体育大会まったただ中、そして県大会がまもなくです。力が均衡しているとき、まるで綱引きの綱が左右に引っ張られて動かない状態が必ずあります。その時です。誰のために頑張ってきたか、またどんなに今まで頑張ってきたのかを一瞬でも思い出してください。とてつもない力が後ろから自分を押してくれることがあります。応援しています。

※参考文献：『１日１話、読めば心が熱くなる 365 人の仕事の教科書』致知出版社，2021

令和４年７月　　旭市立第二中学校校長　加瀬　政美